

夏の嵐

空漠たる世界は何故か
ただ動き続けるのみ

感情は汚く淀み
ただ引きずられるのみ

全ては倦怠にくるみ込まれ
ただ立ちつくすのみ

垂れこめた雲の灰色から吹いてくる
湿気を含んだ空しい未来

細く開けた窓から音を立てながら
吹き込んでくる単調な生活

喜びはおろか、哀しみさえもなく
ああ、行き場のないこの生命

破壊への渴望を沈めんと
息を殺し、狭い部屋の中にうずくまり

積みり積もった無意味な毎日を眺め
ああ、これが人生だとは
ああ、そしてこれが未来だとは

涙を流すことさえみじめに思え
なす術もない平坦さに吐き気がする

夏の激しい嵐さえ乱すことはできない
乱されることを願う私の感情を

ガラスにへばりつく雨粒は私を押し込める
安穩と無意味に満ちた単調さへと

夜明けも黄昏もなく
春も、夏も、秋も、そして冬もなく

情熱もなく、諦めもなく
引きずられるのみの生活、ああ、生活

恐怖と欲望にはさまれたまま
夏の嵐に嘲笑われるがまま
私はただただ耐え忍んでいた
単調という名の試練を

(1985.8.11)